

村野次郎創刊

香蘭

二〇一九年(令和元年)九月一日發行(毎月一回一日發行)

香蘭

第九十六卷第九号

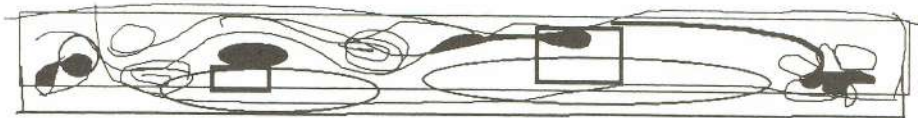


2019年(令和元年)9月号

第96卷

第9号

通卷1065号



香 蘭

2019年(令和元年)9月号
第96巻 第9号 通巻1065号

目 次

	村野次郎作品 私の愛誦歌(49)		
	作品一特選(九月号).....	山口 恵子	表二
	石井・西野・伊藤(康)・大井田・相川・	
	坪倉・鈴木(桂)・土井・松田	
	作品二、三特選(七月号).....	岩田・白井・加瀬・小山・丑山・小原・河野	
	小林(純)・篠永・原(礼)・福原・渡邊(典)	
作 品		4
	一.....		6
	二.....		22
	三.....		30
	推薦香蘭集.....		38
	香 蘭 集.....		39
	七 首 抄(七月号).....	宮原・白井・市川・有馬	20
	村野次郎への旅(114).....	千々和久	19
	エッセイ・自由研究 利き足の悪魔.....	河野慎二	44
	他誌拝見 106.....	牧野道子	47
	焦 点(七月号) 花や木のうた.....	香山静子	48
	作品一特選欄評(七月号).....	桜井京子	50
	作 品 評(七月号).....	石井雅子	52
	手塚春世	54
	内藤美也子	56
	牧野道子	58
	加藤英彦	60
	田端明	68
	明宝研究会第一〇八回六月例会.....	丸山三枝子	70
	文法あれこれ(4).....	丸山三枝子	73
	緑 地 帯.....	丸山三枝子	74
	歌集管見 松村由利子歌集『光のアラバスク』評.....	丸山三枝子	75
	歌書管見 高旨清美 雨宮雅子作品鑑賞『昼顔賛歌』評.....	丸山三枝子	77
	他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向.....	丸山三枝子	78
	令和元年度香蘭短歌会全国大会記.....	丸山三枝子	88
	歌会及び会合・会員消息・他.....	丸山三枝子	92
	編集後記・新宿日記.....	丸山三枝子	94
	令和元年度香蘭短歌会 全国大会記念集合写真.....	丸山三枝子	表三
	表紙絵.....	丸山三枝子	和雄
	中村 陽子「鏡を置けば.....」	丸山三枝子	
	目次・緑地帯カット.....	丸山三枝子	

村野次郎作品 私の愛誦歌 (49)

まなかひに聳えんビルを浮べつつゆるがぬ

礎石今日ここに据う

『村野次郎歌集』

『村野次郎三百首』99首に収められている昭和四十五年の作品です。

当時は角筈、現在は西新宿の一角に、ビル建築の大事業に踏み切られた先生がその時のお心の内を詠まれた作品でありましょう。

やがて「まなかひに」聳えるであろうビルを胸に描き、揺らくことのない礎石を据えられたお喜びと共に、はや晩年ともなされた御決意をうかがい知らされます。

また昭和五十年作の「あきれてはをれぬ地価表追ひかけてのがれ得ぬ税目白押しに来る」(『次郎三百首』118頁)を読み、大事業故の御労苦が偲ばれます。

明宝ビルの礎石は吾が香蘭短歌会の礎石でもあり、今日まで、そしてこれからもこの礎石の上にもまことに恵まれた歩みを続けることが許されております。

改めて先生を偲び感謝しつつ香蘭誌の頁を繰り、学び続ける者達でありたい。

(短歌研究文庫『村野次郎歌集』25頁、『村野次郎三百首』99頁に所収)

四 選 者 の 作 品

紫 陽 花 平 塚 千々和 久 幸

懸案を抱えしままに五月過ぎ六月の逝くあじさいの雨
紫陽花にさほどの思いあらざれど美しと見つ人去りしのち
絵空事のような時の間を漂えり妹は未明に自死し果てたる
排水管工事説明会のあと選歌しのちに酒すこし飲む
昼酒にほろり酔う頃チャイム鳴り校正ゲラが速達で来る
校正が早めに終わり天麩羅を食わんというにわれも従きゆく
職を退き以後の交流絶えたるに葬儀の案内が四方より来る
妹の葬儀を終えて明くる朝いつもと同じ飯を食いおり

楽しむべけれ 東 京 桜 井 京 子

日の暮れは遠世の人も傍にきて聞いてゐるらし山鳩のこゑ
雨ふつてゐるかと問はれ然う雨は百年のちも降らむと答ふ
この場合の「る」は連体形か終止形そのいづれとも「る」はふるへをり
文法は楽しむべけれ例外の「な来そ、な為そ」は未然形なり
川柳と短歌の違いはなんですか先生しばしかんがへてゐる
めづらしきは「愛すべきだ」の意味にして珍しきこと言へり古人は

かぎりひの春の大路をひそやかに牛車は帰るよ欠伸をしつつ
こもりくの泊瀬の山の彼方なる椿山荘の螢は消えにけらしも
打ち明け話 横 浜 渡 辺 礼比子

食べられぬ一日なりしを眼剤のレンドルミンがほのかに甘し
ひそひそと語らう人らバス降りて竹藪の道へ入りてゆきたり
全員を敵にまわしていやですとがんばる人を今日は羨む
セレモニホールドアを出てきたるおみな四、五人泣きくずれたり
いもうとの打ち明け話聞きながら空腹感のかすかに兆す
体調は戻りつつありプラタナスの葉陰に青きつぶら実のぞく
冷蔵庫でゆっくり解凍しています 君に預けてみたき心を
古紙括る十字の紐のゆるゆるのまにまに齢むそじまりやつ

白 き 蝶 鎌 倉 香 山 静 子

歌詠めぬと悩みて居れば白き蝶たをたをとわれの肩に止まりぬ
よろこびのごとく蝶は飛びゆけり梅雨の晴れ間の空気を分けて
若き日にあれほど憧れていた兄が淋しきまでに老い深まりぬ
故里にゆきても会ひたき人なきと思へどやはりわれのふるさと
あの人もすつかり老いて故里はいよいよ遠し海を距てて
ふるさととはやつぱり遠い されどわが心には近しあの家あの丘
海見ゆる故郷の丘へ行つてみよう 心に描くだけでもいいさ
いつまでもよくよするのほもう止さう 生きてる時間が大切だから

作品一特選



(九月号作品、五選者共選)

船溜り 習志野 石井雅子

港には昭和のままに(船溜り)ありてアサリ船しづかに並ぶ

川端の柳の向かう蛇の目寿司に姑と行きしは若妻の頃

黒髪と讃へられても抜け落ちてのちは不浄のものと嫌はる

君が待つ池の畔へ森をぬけ青葉時雨にしとど濡れ行く

動かないハシビロコウを動かずに見ている君もお一人様で

足裏の砂をひきゆく引き潮の変らぬ愛とは嘘くさいなり

わが家より僅か五分の病室に空を見てある病む人とわれ

昭和の恋 東京 西野美智代

君の声にたどりつくまで幾人か想ひ深めし昭和の電話

何もかも要らぬと誓ひし恋なるに互みに親を捨てられざりき

一別より五十年はも夢の間に翁さびたる姿浮かばず

旋回をしつつ墮ちきて静かなる青条揚羽に光がそそぐ

積極的平和主義とは如何なるや平和に忖度あつてたまるか

梅雨寒の部屋にこもりて向きむきに碁を打つ人と読書のわれと

出し抜けや成行きまかせはもつての外老いの坂道ねんころに行く

品種改良 東京 伊藤康子

茎太く伸びるは品種改良の苗なり当たり前なのだけど

苗ごとのペースに伸びて黄の花を咲かせ実らすきゅうりはきゅうり

五年ぶりと微笑み杯を合わせたるキミから話し出すまでしばし

シャンデリアの光の映えるシャンパンのグラス持つてる私はかげろう

おめでとう当たりはスマホケースですスマホはないけどちよつとうれし

両国は四つ目の駅最接近の全国大会に参加の叶う

軽やかな近藤さんの皿まわし大会の宴に元気づけらる

ランチ 川崎 大井田啓子

庭園の緑の見ゆる窓ぎはに三人向き合ふランチせむとて

ハンバーグと一人が言へばじやあそれとメニュー表は閉ぢられにけり

青空に突き抜けて立つビル群が遠い記憶のやうに輝く

ひえひえの丸ごとトマトがめいめいの前にサラダですと置かるる

ハンバーグを食べつつ聞きをりキッチン皿と皿とがぶつかる音を

このへんにあつた新宿三越はとつくの昔になくなつた ねえ

横断歩道を渡り終へしが道ばたに別れの挨拶ながなが続く

水張田 川越 相川 公子

申し訳程度に残る水張田に今年も五月の入り日きらめく
ひさびさに町の人口増えたるを自治会新聞大きく載せる
指示どほり令和の額持ち写される嫁の氣遣ひ今日は良しとす
妹が遺しゆきたるカーディガン梅雨寒の日は取り出して着る
寂しさを抱きゐるごと観覽車日暮れの空をゆつくり廻る
怠けゐるわれを励まし届きたり梅干し用の三キロの梅
ねんごろに塩を塗して漬けこめり朱き頬したやうな梅の実

今 昔 ふじみ野 坪倉 寛

紫陽花はころを違へず咲きにしがででむし見えずなりて久しき
蟬の穴あまたのありて青松虫が賑やか過ぎる庭でもありき
山峡の小さき空の闇に見しあの天の川くきやかかなりき
消え去りし遊びの一つか鞭独楽は父が器用に作りくれたり
ながきながき昔話の禪が今のをさなに解るはずなし
五寸釘を地に投げ刺し遊びたり今ではとても親許すまじ
籠^{なご}返し、杉鉄砲を思ひつつジグソーパズルの画面で遊ぶ

六月の光 西宮 鈴 木 桂 子

会終へて帰る夕べの空低く赤き月うく千里の街に
背^{せな}に聞く(氣をつけて帰りに)同僚の関西ことばの語尾のぬくもり
おとうとに不運は宇宙の摂理ゆゑ身を嘆くこと姉の説きゐる

ふとそんな氣がして笑ふ六月の光は鈍く子に降りゐたり
自死続く 誰かをいぢめる權利など誰に許されてゐるのでせうか
これからのいのちを歌に使はむと勤め終へたる友の語れる
満月の出でし夜なり変身を望むにあらねどしばらくを待つ
狭山の茶畑 東京 土井 紘二郎

なだらかに狭山の丘をうめつくす茶畑しんと朝霧のなか
西空はむらさきいろに暮れてゆき東の空に満月のほる
幾千年波うちつづく岸壁は危ふく反りて海に突き出す
O型とB型は相性よいといふならばその氣になつてゐようか
どうしても好きになれないものがあるたとえばハズキルーベのCM
金正恩と習近平がそれぞれの不気味な笑顔で握手を交はず
二次会は例の店と来てみれば店舗もろとも解体されあつ
そして： 川崎 松田 恭子

日影の道選りて歩かな初夏のひかりは今の吾にはまぶし
大会の別れ告ぐるや重篤の母の病室へひたすら急ぐ
どんな時にも味方でありしわが母のものはや在はさぬ 今日暮れんとす
遠ざかる丸き背中では振り向かず西方の雲に紛れゆくらし
母よ母部屋の真中におろおるとわが立ち尽くす何を為すべき
読みたくない読むのいやだと言ひながら読まねばならぬ本を読みをり
濃紺の背広趣味よきネクタイは私の好みそれがどうした

作品二、三特選



(七月号作品から)

香山 静子 選

〈作品二〉

桜

安来 岩田 明美

標凜木とわたしが決めた桜の樹「ああ咲いてゐる」やうやく二輪
散るときは優しき風に抱かれよ雨に打たれて寂しきさくら
暮れがたき春の夕べの山ざくら館色の若葉のほのかな戦ぎ
三万石の藩主の墓への切通しすみれの咲くを秘境と歩む
紫に濃きあり薄きある董ここだけの風の通り過ぎゆく
ゴビを行く駱駝の蹄の跡を消し黄砂はるばる吾が里に降る
・自由な発想が魅力的

六 花

長野 臼井 紀代子

固執より解き放たれたかのようにみかんの皮が夜の卓にあり
手のひらに溶けてしまえば雪ではない拭ってしまえば涙でもない
さびしいとは言えず寒いといったこと誰にもわからずそれでよかつた
最安値半額特価二割引キチラスの文字がせつなく歪む
閉じられた臉のような静けさに卯月の六花降り積もりゆく
おとついの六花が庭に残りいるタオル一枚落ちいるように
・固定観念に支配されていない

青信号

東京 加瀬 喜美江

ほんやりとメールを打ちつつ乗り過ぐす朝の失敗やってしまいいぬ
博物館に色絵大皿見し孫はこれでカレーを沢山食べたい
沢山の優しき頂き忘れない初枝さん逝きし花の散る頃
ありがたうを伝える月なり三月は感謝と淋しさ行ったり来たり
新しき歌友の入りて賑やかに皆張り切るならん春の歌会を
青信号紋白蝶と横断すゆらりゆらりと仲間になりて
・率直な思いが詠まれている

たんぼぼ

倉敷 小山 ヨシ子

通過する電車の軋みやわらげて菜の花そよぐマンションの前
結局は神社やお寺に足がむくふるさとさがしの旅は今度も
穏やかに流れは元にもどりたりサッカークランドすべて飲みしが
この春の中州の異変菜の花が異常に繁殖外来種らし
人猫犬見かけぬ町に春が来た浸かりし田んぼの畔にたんぼぼ
真備町の路肩に咲かすチューリップ赤白黄色みんな短い
・リズムミカルな歌で明るさがある

〈作品三〉

粗相を褒める

さいたま 丑山 眞弓

町中の自転車置場の片すみにわが春來たりとタンポポは咲く
スーパ一のケースの角にこつそりとさくらでんぶは置かれていたり
少しずつ葡萄の新芽がふくらみて今年も元気に育ちゆくなり
老犬に「お前はえらい良い子だ」とコロコロうんちの粗相を褒める
食べて寝る起きては食べる生活の老犬それでもいややされている
・老いゆく者への優しさが見える

二月の富士

鎌倉 小原 裕光

異常氣象を告げんとするや農鳥の二月の富士にはや浮かびたり
ようやくに我が手にしたる師の歌集表紙は北の海の色見す
軋みつつ横須賀線の通りゆく素心蠟梅の咲き初むる里
鼻高きモアイの像の見上げいる今朝の渋谷の冬晴れの空
冬の鴨未だに來ない谷戸池の桜紅葉にアヒルが眠る

・対象物の描写が的確

春の潮

鎌倉 河野 慎二

ビギナーズラックで鯛を釣りしより春の潮に酔ひたりわれは
猫が乞ふ妻の喰ふ米研ぐ俺に三度さんどの母の務めを
大寒の工夫が尿する夜の路地に万法流転の音ひびくなり

職のなき身をさし入れたる地下室はジャズと酒売る薔薇色の函
愛さるるものは危ふしこはこはと友の腕よりみどり児を抱く

・自在な発想の持ち主で楽しみ

星なき空

横浜 小林 純子

横浜の星なき空へふたたびのスーパームーンは墓地を赤くす
雪催ひ毛糸手袋口に当て弾け笑ひし登校少女

ものの芽の芽吹くにほひを放つ娘の嫁ぎし後は花の香のせり
白コート引つ掛け下るきざしはしに雪女郎めく花なき二月

国道と環二交はる十字路に懐メロひとつ風が歌はず

・また若さのある女性の勢いが感じられる

東京市四谷區

川崎 篠 永路子

謂れある坂であるらし四谷區に油揚坂鉄砲坂あり

父母祖父母のお骨と共に明治四年ひい爺さんは上京したり

北伊賀町新堀江町箆筒町いつまとまりしか三栄町に

円通寺ぬければ四谷荒木町ひい爺さんの影が行きたり

四谷區に住みて愛嬢のひい爺は東京の人となれただらうか
・東京の町並に吸い込まれそうな魅力がある

メンズヘア

横浜 原 礼子

迎え来る令和の年を指折れば過ぎゆく平成の重さ身に浸む
刈り上げたメンズヘアに陽光が憩うがごとく毛先は輝く
夜明け前ラジオに流れし今日の花目覚めてみれば名前ははずこ
平成の終りに授戒せる夫と吾み仏の教え抱きて下山す
もう一度故郷の地へと行きたいと異口同音に語る夕張会

・竹を割ったような歌で快い

新年号

横浜 福原 捷子

号外に群がる人ら波のごと新年号の列島に寄す

ちぎられてまたちぎられし号外を宝のごとく抱きしめる人
まなごとじ我が年月を思うとき平なることひとつかふたつ

庭先の梅の香におうその下に少女二人の竹みおりぬ

役所より厚き封筒渡されぬバトンのごとき後期高齢

・新年号の年に後期高齢の報せを受ける

昂り

鎌倉 渡 澄典子

初花の息つきを待つきのふけふ むかしむかしとふお話ありき
あかときのさくらさくらを耳すまし待つ今年この春
全身をめぐる疲労の拍動をききつつ病みをり風鳴りの夜
はろばるとひつじ雲遊ぶ青空はCT検査の室の天井

こまやかななつなの花に置く露のひかりにも似む日々の想しは

・作り物ならぬこの文学性を大切にしたい

村野次郎への旅 (114)

「地上巡禮」と次郎 (七)

「地上巡禮」が短歌の専門誌たるに留まらず、広く詩や散文にも門戸を開放していたことはすでに書いた。今回はその第一巻第四號(大3・12)から、次郎の周辺にあった詩歌を紹介しよう。

萩原朝太郎の詩「夜の酒場」は巻頭の「巡禮詩社」の言葉に続く「詩集」の欄に、室生犀星の詩「唾」の次に掲載されている。

夜の酒場

萩原朝太郎

夜の酒場の、
暗緑の壁に、
穴がある、
哀しい聖母の額、
頭の裏に、
穴がある、

千々和 久 幸

ちつぽけな、
黄金蟲のやうな、
秘密な、
魔術のボタンだ、
眼をあてて、
そこからのぞく、
遠く異様な世界は、
妙なわけだが、
だれも知らない、
よしんば、
酔つばらつても、
青白い妖怪の酒杯は、
未知を語らない、
夜の酒場の壁に、
穴がある。

この詩は「蝶を夢む」(1923年)として

編集された詩集の中にある。後に『萩原朝太郎詩集』全15巻(筑摩書房、1975年)の第1巻に収録された。

朝太郎は愛飲家としても知られているが、ここには素直に酒に酔えない厭世家で拗ね者の詩人の顔が見える。酒は愉しんで飲めば好しとする「酒好き」と、つねに己と世間に問いを抱えて飲んでいる「酒飲み」とでは、おのずから飲み方が異なる。「酒飲み」にとつて酒は考えるために、己の世間への対し方、生き方を杯に浮かべて飲むためにある。

この詩は「哀しい聖母」の額が伏線になって、酒場の穴から己の向こう側の「異様な世界」を凝視するかたちになっている。向こう側から見れば、こちら側の人間の姿態こそ異様である。作者は酒場の穴の向こうを覗き、自分の生き方、存在の有り様を納得したいのだが、見事に肩透かしを食わされる。

向こう側で飲んでいる「青白い妖怪の酒杯は、未知を語らない」のだ。それは己の影がそこに投影されているからに過ぎない。なぜ聖母が「哀しい」のか、何が聖母を哀しませているのか、酒場の壁にはなぜ向こう側を覗くための穴があるのかという問いは、「酒飲

み」にそのまま跳ね返されてくる。

たぶん酒は、そんな己との対話のためにある。酔つぱらつても向こう側から応答がないとすれば、己の正体は己に問うしかない。

朝太郎の中にある負い目や厭世観、ニヒリズムは、こんなかたちで詩に結像する。

続いて「歌集」欄を覗いてみよう。そこには後に次郎と行動を共にすることになる、懐かしい顔が見える。

・掌のなかに光りあふるる麥の種子こめこひそひそと蒔くところなりけり 河野 慎吾

・つゆ霜の光り冷たき野菜畑大きな足が動きゆくみゆ 同

・くるしげに紅菊光り息づくときぬがに女を思ひたるかも 同

・ゆふまけて葉かけにくらくたはずむも七面鳥のうれひなりけり 酒井 廣治

・屋根うらに炭團つぶらに乾ざれたり棟木に鳥の糞ひかるかも 同

・大いなる酒樽の底一面に日をてりかへすまつびるまかも 若林 牧春

・小雨ふる庭の隅なる薔薇の葉に白き露ぬて

わが身さびしも

同

河野慎吾は白秋の各歌誌に加わったあと、大正7（1918）年に白秋のもとを離れ、次郎と「秦皮」を創刊。またこの年、次郎と共に白秋の「推讃の辭」（「朱樂」復活號）によつて広く詩歌人に紹介されたことは「香蘭」

人の多くはご承知のことだろう。

酒井廣治と若林牧春も白秋の歌誌に名を連ね、のちに「香蘭」に籍を置いた。しかし白秋の「多磨」旗揚げに従い、「香蘭」を去つて行つた。「多磨」解散後、酒井は「コスモス」に、若林は「中央線」に籍を置いた。

前回、わたしは村野先生の「大提灯」一連を読みながら、「おそれけり秋」や「感ずるあはれ」に触れて、近代短歌は主観語（感情表現）を恐れないと書いた。

この傾向は先に引いた河野、酒井、若林作品にも見とれる。どの作品も事象がそれぞれくつきりとした輪郭を持ち、溢れ出る感情を直截に歌う。これがこの時代の感受性であつたのだろう。

最後に卷末の社報を紹介しておこう。

□「地上巡禮」第四號を簡単に本年終末の詩歌集とす。予等は益々慎ましく光る。

□歌草選抜の方法を今號より多少改めたり、

時として一首の秀什を光らして他を驚かす人もとより尊重すべしとなせども、その實力にいたりては極めて劣れる人あり。この技巧すぐれたれども才筆徒に浮華なる内容の虚飾に甘じて、丹念ならざる人あり。その間に眞に箇性あり、技量ある人おのづから光る。數ヶ月試練の結果は今日以後漸く露れむとす。歡喜云ふ可らず。新人出でよ、新人出でよ。

□來春以後は愈着々として新人推薦の實を擧げむとす。たゞ社中諸子の精進を待つ。

□本號の歌凡て佳作ならざるはなし。愈われ等は權かむとす。掲載順序の如きはさのみ神經を悩ます可きものにあらざつたゞ私心なく、朗らかなれ。予等は當に眞實なるべし。たゞ博く愛せよ。悲しく光れ。

□惚れろ、惚れろ、地上巡禮に惚れろ。

こんな雑記にこそ、白秋の詩歌に対する思想がよく表れている。「浮華」より「眞實」と説き、そして「惚れろ、惚れろ」と歌い上げる。この信念は詩歌を越えて白秋の人間觀に通じていよう。

11